言靈のさきわへ

中篇

1926

黒澤翁滿大人著

此書は早く世に廣まれるこゝろだまのしるべの中篇にて
さゆるてにをはの巻あれば世にあるこゝろのてをはを
もの數九百四百余りあるを盛く出して其心を解あらし證
哥を引て其用ゐやうを示されしるゝあめされば万葉集に人
がゝるべきいにしへあるべきあるべいにしへ古今集に渡めさてねばあるべ
ねば百人一首にてふのあるてふの類あるべ古説に解
ゆくさだしてて其心を誤れるてにをはゆゑも其外にも猶ゆゑ
多くあるを始て委しく解あきらめられたるあれば古哥を
解にも自ら訛にも哥の事にうるさる輩は必ゑ心得ぞして
い叶そざる書あめ

阿豆麻園藏梓

初の父母に門人たちつゝみたてまつる板
うつしたてまつりてさてこれを
法華経にまのはたもあらいあるまゝ
こゝあれもそれに法別あるものにそれ
わたさ行れたいあるたさ見は四ちるこあれ
世ゑの奥義ちさあるべしたん人のたゑ
ま四ゆ法華経なるうゆむ法別いゆ

歌よみのうへに用ひ来れる格例は法令條は
まことにたゞ此ことわりなきにあらねど
いまだ初学の人のうへには心に入がたく悟るに
うとかるべければこゝにあげず（さまし）けむもしるべ
まづ志るく示しおきつゝゆく／＼はいふべし
集めてこゝにいはんとはおもへど（中略）まことゝあれ
くなりて後つひにこのものにあらはすべし（下

然初学者は先此の格証をもちて入なれ
ぐ悟りやすかるべしされば猶たゞあれ
後くまし。ことにこそあるべしこのところには格
此書三巻なり一格の活用をさらにしるしの辞
にうへにそのゆゑさへ見えぬ見らしとやうにいへるは
いまだいふものみとしてゆるにいへるほどし
このほどに見れるを見たる哉おもむきのえ出しつく

[illegible]

人麿赤人[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

言辞乃[illegible]算術の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

父の詔をもて序にかつ記し法の政

三年三月 遠海真也

言靈のさゝべ中篇上

黒澤翁滿著

門人 石澤清速
大地正宏 校

總論

○こゝんおの事ハ古くよりめ是彼さぶらふ人々多こゝろみぶも辭の事ホハ及ばざりしを古ゑハ此てふをえゝふ言ふものゝ儼ゑめし事を本居宣長始て見開きて詞の玉の緒を著してよりめ世ホさる事有ゝ知る人ゝハいぞもホ彼人のゝみじき賜ゝふ居しこゝく糸口の鮮を先てハ年月ホるゝゝ物の委しくゑめゆく理ゑきバ今ホゑめてハ彼

玉の緒も猶ほそぼそや覚ゆるふしぐ〳〵無ふしもはべるべ
あん成ふるわのれ本より学び浅く見る事廣くべべて
いとふぐも初学びの爲ふ見安くもひ事をやくはして今此
書をはらたきる也柳辞ゆいふ物詞の外ふ別ふあるふ有
べ云云。云云ふ云云を。云云。あゆぐふ類の物を廣くさ
して辞ゆいふ也是ハ常の詞ゆい異ふして千萬の詞ゆ
もの間ふたるべて其詞ゆもの心をはらたし用をあを
物ゆ譬ゆ家居造るふくびてふ物あるゆ如しくびて
ハ家居ふ用はる物ふい有ぐれども是無てハ家ゆ成難し
されば家造る爲ふい求あるゆ如くふして又本あるゆ如

し詞ゆ辞も則此類ふて辞ハ常の詞の奴の如くあれども
又主の如く必無てハ得あらぬ物ゆ此心をはきらえざ
れば謬ふまた文ふまれ誤る事常ふ多し古言のいはれご
とつゆしを見て必たるとつふ見過ぬまじきゆされ
べ今此辞ゆもの有限を引出て辞の巻ゆしそれゆ心をあ
らたし古詞を引て證ふし今の俗言ふはる〳〵解辨ゆ
然ぬゆも上ふも云る如く詞の用をあきれば辞ハやゆて
詞ふして詞の外ふ有ふはるねべくく分らんえでも有ぬ
きふ似られゆ總て物を委しくきひゆるふハ種々の部
を分ちあゆをぶれば まゆひ安き物あるふよりて是彼ゆ

巻を分ちて常の詞に言痛まぐに分ち云てあづみらるべき

○今こゝく辞の有限を出してそれゞ理を論ふに付てハ理も

ていとゞ然いとゝるべき事の然云る證おき物あり譬バて

めてふ辞あるべの如きてあゝ云ることてそれゞ

ゞもいとゝるべく思たるれゞ然云ふい見當らざる也此類

いゝ多し詞のよめきしるまゝに昔よりわのづるいひ

もらしるも有べく又廣くあゝ見いづる事の有も

又多こるべしをハ見出しるむ人補ひてを

○又右に云る同じ類に理の上のみこるをもいとゝやう

なれゞも本ゝめさる辞の有べくもいるあ物も又多しを

い次々あぐゝ其所々にあも云て味ひ見べし

○同じ辞ゝいとゝゞも其もちるべまに從ひて心異に聞ゆる

物多し其所々に引る證諾等を味ひて委く細に知べき也

今の世にいこゝる筋に心を用る人い一むきにふづみ

て古言の廣きを知ざるこゞ如く又大方いむぎに心を用ゐ

ぞしていゝゝみゞもとゞそしく辞を誤る人多きぞこし

○同じ辞ゝいふ中にも或いに||きゆの添て||きゆゝいひ

或いてに||ましの添て||てまし||に云る類い唯重るのみに

て文ゞ心ゝて別にいるべれバ唯書のそるのみに

其心を云ざる物も多しうつやうなるハに。の部ににの心をいひてぞの部にきたりの心を云て又て。の部にて。のこゝろま。の部にましの心を云ば是彼見合せて知べきなり

○辞の中に群異なる物ありなりふりの類也是等ハに。て。な。ぞ。ぞ。の辞ながらもよりて有。ハふ詞に受るにて辞な詞な交るる物なり又辞に似て辞にならざる物ありべくぞつりごふぶさゝきるまでうるよりまふくなるの類也是等ハ辞になるべ各一の詞なりされども詞の中の奴の如き物にて詞の下に付て用をなせる事大方辞に近き物なれば今ハ是等をもまじへて其所々に本よりの辞なく

分ちたるよしを云りされども是等ハ細にわたらぬことに有ざれば猶もれたるも有べくこそ

○詞に古きあり新しきありのまぎれ来たる如く辞にも此差別ありそハ其所々に引る詞どもの時代によりてわかつべう ら辨へ知べし凡古今集をもて中ながら定めて成べき限ハ此集をもて引れ扨夫より古きハ萬葉集古事記日本紀にも及び又後なるハ夫木集なぞまでに及べり

○次にならべる辞どもの部ぞて五十連音の序にもよらず又いろは詞の序にもよらざるハ唯思ひ出るまゝにかく書つけばなりそもじめの方に云る事ハ委く細なるも後の方ハ

始ゆづめてゆるゝ云る事も多きれば更に改先正さん
ゆゝしきもしべいふゝまづらたしく又さまゝぎもあき事あれば
さゝ有あめ人はやしむ事あつき
○受る辞の格い上篇詞の活の所に云て又辞の結の事ハ是
も上篇詞の結の所に云て今此篇ハ唯辞の心を云るのみ
ふれば上篇に云る事ぬゝるゝみに見合をゝ總ての理
をさゝるゝばし
○上巻ふも既に云る如く諸の伎藝に奥ゆるし中ゆるしふ
ゆゝ云事の有ハ本より賤しき俗意ふれぬも其業に進む爲
ふハ由無ふしも有ざれば此書ハ其筋にたもむきゝる事

多しされば上篇ハ表にして此篇ハ裏也ゆゝきるばし表の
ゆまづしゆゝ見ゆる事までも守めて学ぶに有ざれば此篇
を見ても辞の心を解る筋々明らゝるゝ惑えしゝるばし
しされぬ言靈の幽玄微妙ある境ハいとやはく理もゝて押
極むばゝらぬ物ふれば此篇ゆゝふぬも猶其奥ふハ遠し
ゆゝ知ばし奥深き境の論ひハ始よりよく学びよく守めて
後に有ざれば中々に事を破て道を強る仲立ゆも成ばゝ
らん事無ふしも有ざるばきを先此上中の二篇をもて
初学びふい足てふしして有ばき也さゝを有ゆゝ心の及ぶ限
てい試に云も学びの爲あれば第三篇に至めて我國の詞

の活用辞の定まり細かに鮮なる事を委く論ずる中に疑へ
しきふしぶしをも漏さず出し又今の人の耳に慣れ奇
しく思はれてさハ活くまじき詞等と古人の廣く活こし
る例ぶぞもを揚て世々を経まゝに詞の活きも自廣く成
ぱきを理を論ひ又古書に出るまゝの書の文字を後に こうふ
書ふうつをるよりめ活きを誤て傳ずるる證を引今の害ゆく
あるる事を論ひ總て詞の道に法則有て又無こと如くいるや
しく妙に活用して事を誤らざる言靈の徳を且々も論ひ
られバつゝぞを失ずして見るぱきるめ

目録

えの部

○え 一のしる
○えしも
○えそ 二のしる
○えや 三のしる
○えふぞ
○えこそ
○えふや
○えゐん
○えうめ

○えも 一のしる
○えや 二のしる
○え 二のしる
○えぞ
○えこ
○えゐめ
○えゐん
○えうめ 四のしる

をの部

○を　四のひら
○をも
○をや
○をや
○をや
○をゆ
○をあん

その部

○そ　五のひら
○そや　六のひら
○そを　五のひら
○そね　五のひら
○そら　六のひら

○そゆ
○そえ　七のひら
○そや　七のひら
○そうし
○そ　六のひら
○そも　七のひら
○そら
○そゆ

もの部

○も　八のひら
○もこそ　十のひら
○もら　十のひら
○もゆ
○もの　十二のひら
○もそ　九のひら
○もや　十のひら
○もご　十一のひら
○もて　十一のひら
○もを

のゝ部

○の　十二のひら
○のゝ
○のみ　十四のひら
○のや　十四のひら
○のふ

こゝの部

○こう　十五のひら
○こうも　十七のひら
○こうや　十八のひら
○こうふ　十九のひら
○こうの
○こうえ　十六のひら
○こうふ　十七のひら
○こうし　十八のひら
○こうゝ　十九のひら
○こうり　十九のひら

○こうら　二十二のひら
○こうる
○こゞ　二十二のひら
○こゞふ　二十三のひら
○こうん
○こうれ
○こゞね　二十二のひら
○こゞゝ

やの部

○や　二十四のひら
○やぞ　二十六のひら
○やも　二十七のひら
○やゝ
○やふ
○やえ　二十六のひら
○やらん　二十六のひら
○やふ　二十七のひら
○やの

ゆくの部

○ゆく　二十七のひら
○ゆくら　二十九のひら
○ゆくぞ
○ゆくや
○ゆくこを
○ゆくあん
○ゆくふ
○ゆぐも　三十のひら

ゆくもの部

○ゆくも　二十九のひら
○ゆくえ
○ゆくしぞ
○ゆくとう
○ゆくこも
○ゆくて
○ゆぐ　三十のひら

○ふ　三十のひら
○ふし
○ふきゆ
○ふきん
○ふあん
○ふしぐ
○ふえ
○ふこう
○ふこそ
○ふも

○ふき
○ふしも
○ふるゆ
○ふつて
○ふしこう
○ふて
○ふや
○ふぞ
○ふゆく

てゝの部

○てゝ　三十一のひら
○てゝぬ　三十二のひら
○てゝら　三十二のひら
○てゝん　三十三のひら
○てゝぬ　三十三のひら
○てゝき
○てゝきぬ
○てゝしこう
○てゝしぞ
○てゝし
○てゝまし
○てゝあん
○てゝや

○てゝこう
○てゝこそ
○てゝの
○てゝふ　三十三のひら
○で　三十四のひら
○でや
○でも
○でぞ
○でしも
○であん
○てゝど
○てゝも
○てゝか
○てゝく　三十四のひら
○でこの
○でん
○でか
○でしぞ
○でこそ

つの部

○つ　三十五のひら
○つき　三十六のひら
○つん
○つうし
○つえめ
○つや
○つあ
○づ　三十七のひら

○つる　三十六のひら
○つく　三十六のひら
○つうし
○つあめ
○つも
○つら
○つめ

あの部

○あ　三十七のひら
○あん　三十九のひら
○あん　四十のひら
○あで　四十のひら
○あく　四十一のひら
○あぬぐ　四十二のひら
○あえめ
○あめうし

○あだ　三十八のひら
○あえ　三十九のひら
○あぬ　四十のひら
○あも　四十のひら
○あめ　四十一のひら
○あごう　四十二のひら
○あんこうし

ぬの部

○ぬ　四十四のひら

○ぬる　四十五のひら

○めれ　四十五のひら
○めらん
○めらし
○めるめ
○めら
○めも
○めや
○めぞ
○めるん
○めるめ
○めっ　四十六のひら
○めらし
○めるめ
○めや
○めふ
○めゝ
○めっ
○めてを
○めっし
○めゝ

○めも
○めふ

わの部

○わ　四十六のひら
○わっし
○わゝ

をの部

○ぞ　四十八のひら
○ぞび　四十八のひら
○ぞきり　五十のひら

○めん
○めを
○わぞ　四十七のひら
○わゞ
○ぞて　四十八のひら
○ぞい　四十八のひら
○ぞきん　五十のひら

○ぞも
○ぞゐ
○ぞや
○ぞぞ
○ぞあん
○ぞしも
○ぞら　五十のひら

み の部

○み　五十のひら
○みこそ
○みこう
○みよ
○みふ
○みの
○みしも
○みや
○みゆ
○みえ
○みも

よ の部

○よ　五十二のひら
○よや　五十三のひら
○よゆ　五十三のひら
○よふ　五十三のひら
○よゆ
○よこうし

ら の部

○ち　五十四のひら
○ちこつ　五十五のひら
○ちこうぶぐ　五十六のひら
○ちえん
○ちか
○ちを
○ちよ
○ちぞ
○ちあん
○ちも

○ちこぐ　五十四のひら
○ちこつぐ　五十五のひら
○ちく　五十六のひら
○ちも　五十七のひら
○ちぶく
○ちや
○ちこう
○ちこそ
○ちこつし
○ちもこそ　五十八のひら

○ちもぞ　五十八のひら
○ちあめ
○ぢや
○ぢを
○ぢよ
○ぢか

○ちて　五十九のひら
○ぢ　五十九のひら
○ぢこつ
○ぢれく
○ぢこつし

きの部

○き　五十九のひら
○きや
○きぶく

○きよ
○きか
○きこうし

んの部

○ん　六十のひら
○んも
○んや
○んえ
○んう
○んあん
○んしも

○んゆ
○んふ
○んを
○んふ
○んし
○んこそ
○んぞ

ゆの部

○ゆ　六十のひら
○ゆや　六十のひら

○ゆも　六十一のひら
○ゆる　六十一のひら
○ゆゆ
○ゆめ　六十一のひら
○ゆれ　六十一のひら
○ゆず

るの部

○る　六十二のひら
○るふ
○るも
○るや
○るぞ
○るあん

○るえ
○るを
○るわ
○るこう
○るこそ
○るうん

○ろらし
○ろゑめ
○ろしも

れの部

○れ 六十二のひら
○れぞ
○れゆゑ
○れぞ

○れや 六十二のひら
○れゆゑ
○れこそ

らの部

○らん 六十五のひら
○らゑん 六十五のひら

○ろあめ
○ろこし

○らゑや 六十六のひら
○らし 六十六のひら

○らく 六十六のひら
○らんこし

きの部

○きめ 六十八のひら
○きれ 六十八のひら
○きらし 六十九のひら
○きゑん 七十一のひら
○きまし 七十一のひら
○きんこし

○きる 六十八のひら
○きらぎや 六十八のひら
○きん 七十のひら
○きまく 七十一のひら
○きく 七十一のひら
○きめこし

○ [illegible] 十四のうち
○ [illegible] 十四のうち
○ [illegible] 十四のうち
○ [illegible] 十四のうち
○ [illegible] 十四のうち
○ [illegible] 十四のうち
○ [illegible] 十四のうち
○ [illegible] 十四のうち

○ [illegible] 十四のうち
○ [illegible]
○ [illegible]
○ [illegible]
○ [illegible]
○ [illegible] 十四のうち
○ [illegible]
○ [illegible]
○ [illegible]
○ [illegible]
○ [illegible] 十四のうち

○ [illegible]
○ [illegible]
○ [illegible] 十四のうち
○ [illegible]
○ [illegible]

○ [illegible]
○ [illegible]
○ [illegible] 十四のうち
○ [illegible]
○ [illegible]

○ [illegible]
○ [illegible]
○ [illegible]
○ [illegible]
○ [illegible]
○ [illegible] 十四のうち
○ [illegible]
○ [illegible]
○ [illegible]
○ [illegible]
○ [illegible] 十四のうち

○こゝを　七十九のひら
○こゝふゝ
○こゝを　八十一のひら
○こゝもゝ　八十一のひら

への部

○へ　八十三のひら
○へゝ
○へこゝを
○べ　八十三のひら

ゝの部

○ゝを　八十四のひら
○ゝ　八十四のひら

○その部

太 たいはさまざまの歎く心をわびて物ふまを事ふまれ有ご中らめ撰分るやうの心持る辞也古今ニ故郷ハ成ふしあらの都ふも色いろそらぞ花い咲きめ同四ハつい時ハ分れ秋の夜ぞ物思ふらめの限也きる同里ハいまを人ハ多めふし宿あるや庭もまぐきも秋の野らある同五秋ハ来ぬ紅葉ハ宿ふ降しきぬ道踏分てふ人ハあし同一深山ふハ松の雪ぞふ消ぬくふ都ハ野辺の若菜摘きめ拾遺ニハこぐせむ命ハ限ある物を恋ハ忘まぞ人ハつきあし是等ふて大方其心を味ふぼし用ひぶまふらめてめしで心異あらぐ如

聞ゆるもいとまぎれひもてゆきべ一ふ落ちめ又唯軽く添へる
のみおて心無ぎ如聞ゆるも多くめ何ぞい何やい何こい
いづらい云云こそい云云ぞい云云らめい云云ぞいあめぐの類也こうう
やうのそい除き去ても同じ事あるを思ふ侍し是歎のこそ
あれば成ぼし今の世の俗言ふも物事ふ付て然あめく歎く事
ある則是あり此俗言のたもあ東人のこめくぞふ
いいよ多し

たもい

そもいそふ歎く心のもの添へる也さまぎいひあれて
い一の辞の如く成て物を強くいひ入く歎く心をもちめ
宣長の説ふたもい恋慕ひて志る心有めく云めぎふ哥のめ
えふおきるいさも朝ゆれぬも中らのいさいきこえねばう
きごろし古事記弟橘姫の謂ふ問し君いもめく有を始て萬葉四我

名いも子名のいほふふ立めもも云云同思ひて有し我児い
もはくれ同五盈いもあげうひ暮し夜いもいもづき明し云
云同二嶋の宮いも同三めくひし君いもあぐいめ多し古今十
ふし草のそてうふ見えし君いも同十一
も同十二ねくの朝けの霜の降いもあぐある是也今の俗言ふ
たる時あぐたあもうやれげく事
ゆるいい此よこあまあるぼく

たもい

そやいそふ歎く心のやの添へる少く其心大方たもふ
おのじ次ふ引る謂詞めくもを味ふぼし宣長ハ深く歎く心也
ハ重く求る心ハ無やんへり古事記倭建の命の御詞ふなづまいやめ見え
同御謂ふも其太刀いやめあり又崇神天皇の条の謂ふみそ

まくりびこのや日本紀雄略天皇の御巻の謌ふんひしたく
みのやたくらたくみのいや拾遺六君ぐ住宿の梢のゆくくゆ
隠るくまぐ〻ふ返り見くしいや六百番謌合八十伴の男もうぐ
わさもいやあゆぐ見えたり是又今の俗言ふいやたや
さてたやあゆぐ〻ふ〻り

文花 たぐいたくらりぐ〻ゆ受くるふてその方強し萬葉六たも
ゆくるり我いぐ恋るゑ云同我いぐきくるる云同二十我いぐ恋
る君ぐをぐくを

不 だい詞の間ふ在て上の詞の心を下へおくぐを辞也又兼
て未来の心をもびくるり續けふりて然らぬもたるをぐも恋
ば恨ば見ば似ば榮ば得ば あゆぐ体言くり直ふ受るもて思ひ

をくるぐし叔又宣長の説ふだい既ふ然る事をいふゆを未然
らざる事をいふゆをの二あり其既ふ然る事をいふだいゆく
ふ相對ひ未然らざる事を兼ていふだいゆくふ相對へり花
さけば花さけゆぐも花さくぐ花さくぐもあゆぐの如しゆく云る
いさる事也猶此既ふ然る事ゆ未然らざる事ゆのけぢえい
詞の活の巻ふ委く云るを見てたるわく思ひ明らむぐし古
今一年ふをば よくをひいい老ぬ然いあれぐ花をし見をば物思
ひも多し後撰六時雨降ふりれぐ人ふ見せもあくぐもれ
ば惜みをれる秋萩このやくふば二重ねくるもたり をくるぐて
ぐ せぐをあゆぐの類のば皆同ぐ事なり

たとへ だやいだ。ふやの疑の心を歎の心をみびくまゝに續けふら
ゆく種くの心ふ聞ゆるあすす古今四久方の月の桂も秋ふ猶
紅葉ちるまゝに照増るらん 同二十 思ひつゝめまゝだや人の見え
つらむいゆんゆく知せば覺ざらまを是らい今の人の耳ふい
ふ文字を加ふてだふやの心や見まゝば聞え安し又古今一心
あるふ折ばもらん 初霜の置まゝいせる白菊の花六帖秋
の夜の千夜を一夜ふあだゝへて八千夜し寢だやこゝく時の
ならむ是らい折ばもらんやねだあく時のこゝんやゝ
ふ見て聞え安し 今の俗言ふていへだ折ゝらばもゝれやゝ
疑のやと俗ふいふ ねゝゝばあく時だあらゝこゝやゝふ心也
ふ替てゝふ事多し 古今三五月來ば鳴もふゝあむ時鳥まゝ

しゝのほゝゝの聲を聞だや後拾遺一心あらん人ふ見せだや津
ふ國の浪速わゝすの春のけゝゝを是等い願ふ心をねびゝ
あさまゝ本ふ別の辞ふいあらゝ上の二種い疑の心下の
願ふ心あるゝ歎の心のみあゝ疑の心をねびざるのみ也 其歎
の心ゝゝふい今の俗言ふ聞ゝらばあ見せゝらばあふ
やゝふ云へるゝ同く下ふ心をふくゝ云て殘ゝゝる物也さまゝ
ばおのづゝ願ふ心ゝ成あるす物語書ゝふ此格多しあほ
ふ女くゝへば俗ふ聞ゝあ見せゝふあゝいふ心を裏ら
ゝふ見せゝるあゝ

ぞてこつり だゝい物事の程をゝふ詞ふして辞ふいあらざまを
ゝゝも詞の中の奴の如ふ物ふあゝ他詞ゝもの類あらねば爰ふ
出ゝつ何だゝう夫だゝうあゝ常ふもゝふい何程夫程やゝふ

ふ心ふて異ある事ゝ分けを必ずし中ふいの〻〻〻ふ心ふ聞ゆ
るもあの伊勢物語ふ今日だつめ〻ぞ田鶴も鳴ある後拾遺
八今朝ぞつめぶふふぶの類也猶のみの所ふ云る〻引合せ
見るべし

○をの部

をい縋て身ふ受入るやうの心ある辞也答言ふを〻
〻ふも此故成ばし日本紀ふ唯々〻ある を始て古書ふ
〻〻〻多し又源氏物語ふいふの〻のみも
又ふに相對ふ引警ば妹ふこゝい彼方ふつめ出さて心
妹をこゝい此方ふ引よるおもむふあり是ふて大方をの
心をさふるばし古今十人の身も習ふし物をあいぶしてん

ぶらゝるみん恋や志めるゆ同六矢づらゝ聲ある〻〻ふ
時鳥らゝらの年をたつぶも有哉後拾遺八都出る今朝ぞの
ゆぶふそうふも逢見て人を別をしこゝば志ぶ其用ぶ
アふ〻めて少しで心異ある ぶ如聞ゆ矢めゝ味ふばし

をゞのゞいふ〻〻軽しさをゞの〻〻狭く重ふ如し
古今秋萩の花をゞ雨ふめらせゞも君をゞまして
ゝを思ふうく二重をゝもこゝ

○その部

そい行勿来勿ふぶゞふばふの勿を上ふ矢ぶらして勿行そ
勿来そゆゝふ下ふ添る是也さをゞ此類の詞ふのみ限ら

るふるふて常の辞ゆゝい異なめ又萬葉七妹こがたつゝめ我袖ふ
らむ木の間よりも出くる月ふ雲ふ棚引同十七家ふしゆゝふわび
我せこ云云ふゞそを略るも是彼多式をとそいゆゝ軽く
添くる物ふる事を知ぢしさゝゞいひおさゝて心強うらむ
るやゝふい聞ゆ古今一春日野い今日いれやそ若草のゝ
そねい上ふ云るそふねの添くる也ねい願ふ心のそふ
とそふ強ゆゝ心ゆゝ強ふ似くめ萬葉二汐子ふあめそね
同野辺の秋萩ふ散そね同七柴ふうめそね同九雨ふふりそ
ね同九雪ゆゝそねゆゝ多し

○言靈のさるべ　○五

そや　そやい歎のや文字の添くる也ねふて上ふ異ゆる事ふし重
文集千早振ゆゝしの宮の神の駒ゆゝれのめそやくめも
ぞそる

そら　是い歎のら文字の添くる也さゝゞそやもそらも全く
同くして心を深くくむるふ似くめ萬葉七わもくるふふ
恋そらゆゝぞ云云源氏若菜下の詞つゝくめふる事ふのくア
ひそら云云

そ　そい物を限て狭くさし又物を手ふ取入るゝ如式心の辞
ふり又やふ相對ゆり譬ゆゝ彼や是や彼ぞ是ぞふゞの如し
やい黠くさして心ぞい狭くさして心味ふぢし古今九北冥行鴈ぞ啼ふるゝ

○言靈のさるべ　○六

て來し數いたらでぞ帰る侍らるる拾遺一物もいそぐあらぐ
絶てぞふる山吹の花ふ心ぞうつろひやすらむ同七面影ふ去
だしい見ゆる君あるぬ恋しき事ぞ時ぞかもあるの堀川百首
秋風ふあびく尾花をタア暮誰ぐ袖ぞかぐぞあやてをける
あぐ重ねてもありて又後撰九淺してふをゆるし多山
の井いほりし濁ふ影い見えぬぞ拾遺十銀の目貫の太刀を
さげたるて奈良の都をわるい誰ぐ子ぞ萬葉十七春花の移ふ
まぐふ逢見ねば月日ふみつく妹待らんぞ同四柳らそをを
ばたえれ世の人の恋ふ死ぬをいうふせよめぐぞあぐ彼
是用ぐぞ異あるぐ如朝ゆるあり大方是ふてぞの心を思

ひ渡をぢし

今いと ぞそいぞふその添てるあるをばたいかく軽くて心
もあるぐ如し則倍言ふ六帖白妙の衣ぐしき春日野ふ
若菜摘しも誰ぐ為ふぞそ同誰ふりも思ひみぐてく心ぞそ
ぬぞ人のつくさあめくる古今八帰る山何ぞそありて
ぐうひい來ても留らぬ名ふこそ有けれ

ぞも ぞもい大方ぞそれふ同じい倍言ふ歎の聲ある則らもあり古今一
色ぐりも香こそあそもふ思ほゆ誰ぐ袖ふもし宿の梅ぞ
も後拾遺四ぐそぐて我こそ來つも山里ふいつりもも
る秋の月ぞも萬葉三十あもをぞも我ふらるかふ我をぞもふ

至ふ考るべふ云云

ぞや ぞやい是又ぞいぞもふ大方同じやい倍言ふやあや云歎の聲ある則是あり

拾遺七ゆさめぜし海人のをしへしいづくぞや鳴廻りて有りゆひしい新勅撰三十このありし時ぞや夢ふ見し事い夫さ

万ふこそ忘らもふけりも源氏總巻ゆつぞやも花の盛ふ一目見し木の木さ万や秋いさびしそ後撰十大方いあぞや我名の惜こうむ昔の妻ゆ人ふ語らむ詞花八浅ぢふふ今朝置露のさむけくふかもふ人のあぞや恋しそ是ふ例の用ゆぞ

さふ考りて聊異あるぞ如聞ゆ先もゆ皆同じ事也考万渡を

ぞし叔宣長の説ふ總て何ゆゆあゆの類の詞の下い皆ふゆ

受る例あるふ唯あぞゆあゆゆの二のこやゆ受る例あり其内ふあゆいこゆ受るぞ多くしてやゆ受るい稀也あぞハや

ゆ受る例のみふてこのゆ受る事あしゆ云るハゆぐ大方世の人あぞあゆを一の詞の如思ふいひゆふ也何ゆ云をあ

でふゆ云如何のふを略る物ふてあぞのぞもあゆも皆辞也さもバぞりめこゆ受る事本より有ぞくもつらざるを

又あゆのゆを濁るもわろ猶此事いゆの部ふ云ぞし

○もの部

も もいてゆをあぐこのふして聊歎く心持る辞也さもバ是も彼もあゆ物の添ふ事ふ用るも此心ぞ万也又暑しふ寒し

も。あるがごとふも。い歎のみふて心無ごゞ如し是則俗言ふ物事ふ付てもふ歎く事ふ
ふ心あり萬葉四東路の手児のうび坂越兼て山ふこうわむも
宿りハあしふ古今五あしぢうり雲井をさして行鴈のいや
遠ざうる我身悲しも後撰五是や此行も帰るも別きて知
も。ちらぬも。逢坂の関後拾遺四秋も秋今宵も今宵月も月所
も。所見る君も。君同四白露も夢も此世もまぼろしもふ定
て云ば久しうりけり六帖ふふうしも去年も今年もをゆく
ひも。きのふも。けふも。我恋る君ゆゆ多く重ねも云
又萬葉ふい今日もうも明日もうも。あゞ云るも多しあと二あゞら
歎の。ふて唯今日う明日う。ゆふふ心あり扨又一種の。ありふそんの通るあり

凡古百い云ん写ん。あゞのんも正しくむゆ云ひしうばもゆ
い殊ふ近く通る成ぢし萬葉二人目多みたゞふ逢ゞてけゞ
しくも我恋死ゝば誰ゞ名ふとうあらも同十二よそにのみ見て
や渡らも。あふそゞ雲井ふ見ゆる嶋あらあくふ千載四人
もゞふ見せも聞せも萩ゞ花咲夕影の日暮しの聲但此詞い見せも聞
せもせんゆゆふふ心を云殘しうるやうみも聞ゆ則千五百番
哥合ふ本あらの萩の下根ふ鳴虫の声をゞ誰ふ見せも聞せ
ふ又六百番哥合ふ雪ゞゞむ松をみゞりふ吹うゞし見せも
聞せも山おろしの風ゆゆあるい二首ゆもふ千載の哥ふらゆ
て詠る物あゞゞ六百番の方い見せも聞せもそゞゆふふ心
ふ見ゞゞば解ゞゞ然るを宣長い菅家萬葉ふうぢもゆ
ふ郁子羊ゆゆ書ゞもを店ゆゆ書蜻蛉日記ふいもゆふふぢ所
にんゆゆ有軒多し是ホんゆもゆ通ふ例あゞゞば六百番の
哥を誤ゆ云ゆ今い其説ふらゆて引ふゞゞ猶思ふふ萬葉の
古言の其後い絶て聞えぬゞゞうの世を経て千載ふ唯一

有の事あるべき事もおぼつかなく其上此哥主い和泉式部か
れば女の呼うりいまゝ覚ゆたゆ見かゆるひ
来ふる事ふるもんゆゝい流を安き彫時の詞づかいのさまか
ゆゝを思ふふも猶云殘しの心ゆゝ見ん方もゝやこうあるぼくや
ようく考
ふぼし

もぞいもゝうめぞゆゝ受ゝる世りそい事を限ゆゝいゆゝ強ゆ
辞あをゆゝもものあゝらこうあるに相添ゝをゝ未来の事を云
ゝい自疑ひあやゝむやゝの心をおゝゝりゝをゝそい過去
ゆゝ未来のけゝ見ふゝ然聞ゆゝふゝをゆをゝ本ゝ別の心ゆ
ゆふゝあゝゝ次ふ引ゝ謂ゆゝふゝ辨ふぼし上の一首い過去の方あり次
の二首い未来の方あり萬葉十立て思ひ居ゝゝぞ思ふ紅のゆゝもゝを
引いふし姿を後撰五天の河流をゝ恋ゝゝゝゝあゝゆ

れゝゝ思ふせふゝをゝゝ見ん同五ふりぬゝゝ思ひも捨じゝゝ
ゝゝもゝをゝゝゝゝゆゝを恨もぞゝゝ

ぞいもゝ

あをゝ其心大方もぞふ同じ次ふ引ゝ哥上の四首い未来の
勢是ふゝ味ふぼし古今二花見をゝ心ゝゝふぞゝつりけゝ色ふい出
じ人もゝゝ知を同四今宵来む人ふゝゆゝゝゝゝじ棚機の久しき
程ふ待もゝゝゝれ後撰九人の上の事ゆゝしいゝゝゝ知らぬ哉
君も恋をゝをりもゝゝゆゝを拾遺二身ふゝゝゝゝゆゝあゝ花
を惜む哉いけらば後の春もゝゝあれ同二十玉ぼらの遠道も
ゝゝゝ人い行あゆゝ時の間も見ねば恋ゝゝの古今三十現ふいゝゝ

こそはるゝん夢ふさ〻人目をもるゝ見るゝまびしら

もや

もやいもゝやもゝふもゝ歎の聲あり今の俗言ふ是いま丈いまあるぶん

ふまあい則もやの

ちこおまり成ぼし　古事記顯宗天皇の条の謌ふめでゆらく

もやゝゝ又おそんもやゝゝ日本紀皇極天皇の御巻の童謡

家も知らじもや萬葉ニ我いもや安見児得しゆ皆人の得ぐ

てふそゆふ安見児得しゆ

もら

もら大方もやふ同じ則上ふ引る顯宗天皇の条の謌を

日本紀ふいめでゆらくもらゝゝおきんもらゝゝ有あり

又古事記ふも吾いもらふも見ゆ萬葉一かゝまもよゝゝ

まもちふぐしもらみふぐしもらゝゝ同五もち鳥の一のゝら

たゝしもらゝゝ

もゝ

もゝが願ふ心の辞あめもゝもゝれもゝもふもゝも

やの類いもゝの下ふ歎の聲の添ゝる物ふて皆同じ萬葉八

我宿の尾花ぶ上の白露を消ゝゝて玉ふぬく物ふもゝ古今

十心ゝ定る物ふもゝ片恋ハ苦ゝ物ゝ人ふ知らせむ同

七かゝして ふもゝふもゝふもゝ君ゝ八千代ふ

ふゝしもゝふ同十花の木ふあらざら先ゝも咲ふけめふ

ふゝこの夕ある時もゝれ同十こひゝねを根ふし山てし吹

風を人ふもゝこゝふてやらむ萬葉一川原のゆゝ岩村

ふ草むさゝ常ふもゝふゝこをふ先ふて

もて もてハ正しくハ用ひもちて也こゝもちもつも
てわゝ活く詞ゆて本ハ手して物を持事ゆゑきらめ移めて
身持心持ゆゑ常ハハふゑめさきバ本らめ辞ハそはゝぶき
ゆゑも軽く用ゐ則てゆてハふ辞の心ハ添て用る事常ゆめ
則もちてゆゝも云ゆ萬葉三我袖もちてこゝさんを云云同石
もちて云云同五十何物もてゝゝ命てゞましゆゑの類ゆめさき
ゞ本い持事らめ移めて辞の如くゆもゆきる物故唐ぶゝの
以の字ゆも此訓を付ゝる也さゝを文字にのみゆづゝて是
い持の字の心是い以の字の心ゆゑ異物のやゝハふいい漢
心ゆて論ふハ足らゞ

もの ものい本らめ辞ハいゆゝさきゆも辞の如く用ゐれ
ゝきゞ爰ハ出しつ扱詞のゆゝゑハ置ゝるい大方をゆゝ云ふ
同じ萬葉四我持る三相ハきる糸もちてつきてましもの
いまゞくゝやゝ同五夫ゆゝぶや鴈ゆもづもや都までおくめ
まをして飛こゝるもの古事記の詞ハ持てこましもの
ゞめるもの ゆゑも見えらめ又をて添て物をゆゝふい常の
事れめ扱又ゆゑ ゝの ゆゑの類ハものてふ事を加て
のゆゑものゝらものゝゆゝやゝハ云る謂多し古今四秋ゆら
で逢事こゝさ女郎花天の河原ハあいぬものゆゑ同十恋を
きゞ我身い影ゆ成ハきめさめゆて人ハそゝぬものゆゑ同

三 時鳥汝が啼里のあまたあれば猶うとまれぬ思ふ物から
同廿 天雲のよそにも人の成ゆくかさすがに目には見ゆる
ものから 同卅 空せみの世の人ごとのしげければ忘れぬ物
のかれぬべらなり 伊勢物語 君來んといひし夜毎に過ぬれ
ば頼まぬものの恋つゝぞぬる 此類皆心の裏にこもる如く
に背きて誰もたのまれぬ事なれども然らず委くあげらの
所に云るを見るべし

○のの部

のは言を續る辭なり又言を略きて心を續るもありさる
なれ其用のさまにより重きあり軽きあり其重きにはがの如く相

通へり譬ば萩の花萩が花などの如し又今の世にはのがと云
詞ありとも多くかはと云習するなり鶯が鳴花が咲などの類最
最多しこれらの外ぞ則重き方にはなりぬる左に引る詞
ければ其大方を辨ふべし がのかはりにはかの部に委し引合を見るべし 萬葉
三 菴ざきの清見の嵜の三保の浦のゆたに見えて物思ひ
もなし 古今二 今もかも咲にほふらむ橘の小嶋の嵜の山吹
の花 同五 吹まよふ野風を寒み秋萩のうつりも行か人の心
の 源氏螢 あらそはでゆるぎ浅くも見ゆるこれはや絶にも
この文なるきるねの 古今四 君や來ん我や行んのいざよひ
にまきの板戸もさゝず寝にけり 新古今六 有明の月をまつ

こそ通ひきをくる人あるしの宿の庭みも古今十吉野川岩波
高く行水の早くそ人を思ひそめてし同夕月夜さやけ岡辺
の松の葉のいつもわすれぬ恋もする哉千載十大方の恋を
る人ふ聞則て世の常のわも君思ふらむ好忠集人妻ゆゑの
のゆゑ思ふふい則來し袖いかてれまさきり古今十二君恋る
涙の床ふみちゆをいみをつくしゆゑ我い成きる同十二をく
ろざゆふつの小嶋の人あらバ都のつゆをいざゆゑいそまし
を同四空蟬の世の人ごゆの志ぎ〳〵きび恋きぬもの。こうれ
ゆばらあり詞花二鳴聲も聞えぬ物の悲しまい忍びふもゆ
る蛍ふゆきり是等用ゆざるふよりてゆきこうで心異れ

るこゞ如聞ゆ見渡して味ふ侍しそゞ中みも古今十一ある行
くゆゆふ心を含ゆゆ又好忠集ふるるゆのゆあるのい今の
俗言ふい常ふゆ雅言ふいゆゆづらし古今ふ柿の水の松の葉のてふのいの如
本の人磨ゆ也ゆ有此ゆ則ゆゆのふ齣をバの文字ゆ
まゆてゆうゞふ聞ゆゆて此事を猶よく考ふ千載ふ世の
常のゆゆゆるい世の常の恋ゆゆ一字
ふ其心を持きゆる物也倍ふ我の物人の物ゆふ事を我の
人のゆの子ゆが如し源氏物語ゆゞふ君の御哥ゆ法を
君の御ゆの子ゆる事も ゆゆふ心ゆ子似ゆゆゆゞバ好忠集
ふるも於い我のゆ書てるゆきんを後ふ我の字をゆ
ゆゆ訓ふゆるゆゆ假字ふ写し誤ゆる事外ふも多し又物のゆあるの
をゆのふ写しゆゆて誤ゆる事外ふも多し又物のゆあるの
い裏ゆゆうゆゆて其心ゆゆゆ異ふゆ猶此事いふゆゆの所ふ
委しく云ゆ引
合を見るゆし

のゆ

のやいのふ歎のやの添るゆてやいゆゆ軽しきゆ
直ふゆひつゞくるゆいゆゆこの同じうらじ日本紀ゆふ

のやきれのわくごがゝゝ萬葉にいたるみのや高角山のゝゝ
同四 みふやのや蘆ぶ中あるゝゝ古今十近江のや鏡の山を
ゝゝ六帖河内のやうくしもの山のゝゝ堀川百首錦のや紐や
く花や見ゆる哉ゝゝ

のみ のみい物を限りいふ詞ゆして丈のみ是のみ云ぶ常ふ
いふふ類ある事あしさきび辞ふいはらぶれやゝも辞ふ近き
をもて美ふ出をり叔ぶうりやゝ互ふ似通ひて聞ゆるも多し
古今ニ我恋い行方も知らぬ果もあしはらふを限りやおもふ
ぶりめを同津の國のあふて思ふ山城のゆゝふあひ見ん
事をのみこそその類也さきぶぶりめい其程をいふ詞のみい
丈ふ限をる心ふて本らめ同じゝうぶ又古今五山の井の浅
き心も思ふを影ぶりめのみ人の見ゆらむやうふふく
ぶ重わゝるも有あり

○加の部

こ こい人ふ物を問ゝるを本ふて自の上ふも物のわきゞ
ゝ多ふつゝふ辞也さきび大方やふ同じくして疑ひの心や
ゝも強しさる故ふやゝ互ふ通をし云ゝも多をゞも又
必ゝこのやゝいふ侍ぶやゝ必やゝいふ侍ぶやゝさゞゝふ分をゝるも
多しぶりめふをゝふ譬ばゆるゝあきゝ見ゆるゝ
聞ゆるゝなりやゝあゝやゝ見ゆやゝ聞ゆやゝあゝぶの如く續く詞よ

アとハこの水受切る詞ハやゝ受る事是大方の格也猶詞の切續の事ハ詞の活の巻ニ委く云るを見合きて准ら可知ぢし扨こゝも用ゐざるさゝぐ〳〵ゐり後撰ハ物思ふゝ過る月日も知らぬ間ニ今年も今日ニたてぬゝこの三く後拾遺十ゐふ

ゐふこゝ有ゝゐふ有る人ゐるし先のゐくま江の沼古今五夕さきバ人ニ床を手ならし歎ん為ゝ有きる我身こゝ同ニ春雨の降ハ涙こゝ櫻花ちるを惜まぬ人しあをれ後拾遺三蘭たゝれそのこゝ山の時鳥有し昔の同じ聲こゝゝ伊勢物語白王こゝ何ぞゝ人の問し時露ゝ谷てきれまし物を同ゐるし夜の星こゝ川辺のほくるこゝも我住方の海士のしく

火こゝ古今二十君や來し我や行きんおもほえず夢こゝ現こゝ

こゝさゝてこゝ同ニ老ぬゝてあゝこゝ我身をゝぎきん老ぬバきふゐゐてまし物こゝ拾遺ニ浮世をバそむこゝバ今日もそむ

ゐあん明日も有ゝハ頼む涙多身こゝ古今一浅ゐゝ糸より掛て白露を玉ゐもぬきる春の柳こゝ同ニゝゝむぢき物ゝハ

あしゐたてあくもちる花ごゝゝふしぐふ心こゝ是等ゐて大方と辨ず知ぢし中ゐハうえの心ゐのこゝ有事右ゐ出きるこゝ如し是うえのこゝゐのこゝゐも有ゝゐ添る物ゐて本

ゐるこゝ其心を持る故也猶こゝゐの事ハ次く云るを合きて考ふ可し

こゝ

こゝハそこゝ歎のもの添こゝるゝて今の俗言に有こゝもあ
有に同じ唯こゝのゝ云こゝるゝゝハ其心強し故に裏返る心あ
こゝ多し上に出る老こゝバ今日に成ぬまし物こゝ明日もあり
ゝハ頼むこゝ身こゝあゝ云こゝも則裏返る類にてこゝまし
物こゝ逢こゝ頼むこゝ身こゝ頼みこゝこゝふ心也此心のこゝ
ハ多くこゝを添こゝ習こゝ終こゝその一の心の如
く成こゝこゝも又こゝこゝゝこゝて裏返らぬ心あるも有こゝ
て其本末を辨こゝ古今十花毎にこゝこゝこゝ風あも
ゝこゝこゝ我こゝゝこゝ思こゝ同けこゝこゝ岩間の中
に住べこゝこゝ世のこゝ事の聞えこゝこゝこゝ是等ハ唯こゝの心の

こゝこゝあゝ又同ニ聲絶こゝあゝや萬一年に二度ゝこゝこゝ來こゝこゝ
春こゝゝ同四こゝこゝゝこゝ心こゝこゝこゝ棚こゝこゝの年に一度あこゝ
こゝこゝこゝ

こゝも

こゝもゝ歎のもの添こゝこゝて大方こゝこゝ異こゝ事こゝし又
こゝこゝゝこゝこゝ同じこゝもこゝ是歎のこゝの添こゝこゝ同じ心こゝ
こゝこゝこゝ也萬葉十足引の山鳥の尾のこゝこゝ尾の長くし夜を
一人こゝもゝこゝ古今ニ今こゝこゝ咲香こゝこゝこゝ橘の小嶋の崎の
山吹の花同九天の原こゝこゝ見こゝこゝ春日こゝ三笠の山に
出し月こゝ同十三玉こゝこゝ明こゝ君こゝ名立ぬこゝこゝ夜深く來し
を人見きんこゝ同和田の原こゝを來る波のこゝこゝ見ま

くのほし多玉津嶋こも同十霜やしびおまぐ枯をゐ榊葉の
ゆたぐ栄ゆたぐ神のきねこのも

こつふい　こつふい歎のおの添しる事上ふ云るこゞ如し大方こもふ
同じくてこもよりいあぐらこうあり萬葉ふいこうあぐ云ばき
所を皆こもゆのみ有てこうあぐ云るハ一もあし又ゆのみ
云てこうあの心あるもなるい上ふ引るこゞ如し本よりあい添
しる物あをゞこゆふこうれの心を持る事こうえの所ふも云るゆ
同じ類也　今の俗言ふハ此こうあをとらいあるよこあまり云
見て聞え安常ふ哉の字をこうあぐ訓事ゆの多思ゆ萬葉ふ
ハ哉をこもふ用ゐ日本紀ふい哉をこうえゆも訓りこいあ

ねゆ通ゆる物ふてこうあふ異ある事あゝ古今ふ出て行ん人
をゆゞ先ひよしあをふゆありの方ふ亀もひぬこうあ後撰十
我門の一村ゆうえん君こゞしあをの駒も来ぬこうあ
是ホハひぬこういあ　ねこうあ　又古今一遠近
のゞしゞゆも知らぬ山中ふ覚束あくも呼子鳥こうれ同ニ待人
も来ぬもの故ふ鶯の鳴ある枝を折てきるこうあ同ある事無
音をも啼こうあ　是ホ事
こういあ　こうあ
ゆく類あり

こうや　こうやい歎のやの添しる事俗言ふ人ふ向ひて有こうや
無こうやあぐいふこうやふ同じ小大君集名のりきゞ梢ふ来ゞ

ほとゝぎす時鳥春にきて来し鳥ならばや見む 拾遺七 何ならやくさの
なづさへおもほえて得やしく花の名こそ忘るれ

し　こうしは詞の終にありて其詞の心を強くしむる辞也
願ふ心ならねば思ふは誤なり古今十 たまならぬをなきて玉
をぬくまゐや是なんそれならうたをみんなし 元輔集 松をの
み引て帰らば梅の花思ふ心の残るらむこうし 後拾遺五十 あかず
むきば月こうしかさぬはなれ我此世の程もさぞこうりぞうし
同卅 長しならて明ぬやは有む秋の夜もまそこうし槇の戸なこゝ
あをぶふ大和物語さても君忘をきめこうし鶯の啼をりのみ
や思ひ出ばず又後撰廿七 ならずこうしなにはくらも似らじ云 云なる

やうにな文字を添ても云り又濱松中納言物語にいとうしや。
ならや。文字を添らるもあり

こそに　こぶは凝のこゝりにも受るに云あるとりなきこふに 云
なむといふ類あり萬葉四十 おもしろき野をばなやきそ古草
に新草まじり おひばおふるこうに 古今七 櫻花ちりかひくも
れ老らくの来むといふなる道まがふこうに 同六十 あくなみぞ
雨ふるなるらん渡て川水まさりなば帰るにこうに 同十二 まな
もくのあなしの山の山人ならん人も見るそうに 山かづらせよ 此
類のこうにをこがになみて下に出たるこがねこがねならで一物也ならでは
誰もく思ふ事なきならでも然らどこがねこがねは切る詞なり受

る格なるを是は續く詞より受る格にて本より異なり且ツねがふはいとみじき古言なれば今の京となりての人の好み詠べくも思ひ迷ふ疑のこゝろより辭のにも受る物から穏なりがたく云べしこねがふの事は下に出すなり

しく　これは他の辭なれども心は異にて寒く寒き寒し暑く暑き暑し恋し恋しく恋しき床し床しく床しきなどやうに活く類の詞なれども心のみ限れる事にてくなりをなどいひてうけなれは云るなり寒く有暑く有を寒かり暑かりなどいふ類なりされば其有も詞にして辭にはあらざれば今辭の部に加ふべきにあらねどもなりかりなどにひかれて然云則ては一のを

にてその如くなりける物なれば爰に出せりはばてぞぞの辭より有りと云詞に受るなれば其群はひかしからざれども心ばへは大方似たり猶其所々にも云るをよく考ふべし萬葉二十吾妹子に恋まぞなからむねをやもや朝戸ひらきをば見ゆるさむらも同七十我をこふ恋まぞなからなくし垣の外になぎこふ我しらなしも是等の類也扨宣長の説に中昔よりの詞に悲しがる恋しがりなどの類に云云がる云云がり云云云事なるは本是が一ゆやあらむ但彼がるがりは必他の上を云時の事なるを是は自の上に云て自他の違ひめあれども心は通ずりと云るはさる事也彼がるがりも本は是より出ける物成べしさて清濁もて自他の上を分つにやならん

扨又こうめきやうめきん　こうめ　ゆかしのゆぬこうめつ　あぶぐの
こうも是也又こうらん　こうらまし　こうらぶ　こうら　あぶぐ　こうら
又こうきび　こうきぶ　あぶぐ　こうきも又こうらむ　こうらし　あぶぐの
こうも皆此活あり扨又此こうのるを略てこうらしやう云
も常の事也猶詞の活の巻に出る寒き寒く　あぶぐの活あの
所々見合をぶし古今一月夜に　それゆも見あぐ梅のそ
香と尋ねてぞ知ぶこうめきる同　恋しこうらぐい
ぶらねぶも秋の夕いぶやしこうめきや賀之集大原や小塩の
山の小松原たやに高こうきも千代の影見む古今四女郎花も
こうる野辺に宿りせば　あやあくぶぐの名をや立あむ同五霜

のくて露のめくらてこうし　山の錦のをれば　散
こうら　こうらは故の活きくる　詞にして是も本　他辞の類に
らねぶも用ゐ則ては　辞の如くあれば出しつ　宜長は故　こうきべの略
くるあてこうらゆは　木らゆ異あゆゆそは故は　詞の上に
付る詞こうらは　詞の下に付る詞あきべさもやゆも思ぶゆ　詞
りてふ詞もこうらふひゆし　詞の下に付る　詞ふるを所に
あてては　詞の上へ　ぶぐらし　勝る事も常あれば　猶こうきこうら　一
物にてれゆらゆ通ひ活くる　是こうら　丈こうら　あぶ常にも云
もものゆ見む方おぶやう成ぶし　則是也扨こうゆ　並びて是こうゆ　丈こうゆ云も同じ又見るに
こうゆて聞にこうらゆて　ふ事を東人は見るこうら　聞こうらゆや
うに云ゆ古今十波の音の今朝こうら　ふに聞ゆるは春のし
らぶやゆらくまるらむ伊勢物語海士のこうる藻に住むしの

わ音をこそおこうた世を夢恨みじ叔萬葉ハ神ぐら
國ぐらあぶ多くこうたるも又今の俗言ハ家ぐら人ぐら心ぐ
らあぶ云ぐらも皆同じ

ぐいの不似てのらゆも重しの部ハも云ふ如く今の世
ハいのぶ云ぐ云ぐも多くぐぶ云習ふ萬葉も又其如く
のぶふぶをぐぶ云ふ詞多し中昔の詞ぶもい大方のぶ
ぐのわいぐ末ゆ体語の下を受ふいの用語の下を受ふい
ぐ。ゆ但ぐなのぐ。誰ぐ。君ぐ。妹ぐ。の類其外萩ぐ。花梅ぐ。枝
浅茅ぐ原甲斐ぐ根ハぶの類体語あぶぶもぐ
習ふもあれぶもうちまうきてい体語
の下いの用語の下いぐハあんりきる古今三十現ハいさも
こそからえ夢ハさ定人目をもぶ見ぐ。わびしさ同六十ぬ

ぐうちハ見ぐをのみやい夢ぶんをむをつゆの世をも現
ぶい見ぐ後撰九秋の田のいねふふぶをこうをしこそ思ひ
出ぐ。嬉しぶもれし此ぐの辞ハつぶぶい心得誤る人多く
詞ハいぶしもあきれぶ文ハい書誤らざるもをさく〳〵無ぐ
如くあぶび猶委く辨ふ居し下ハ出きぶ者の辞をしぐぶ
濁アて早苗取しハ思ひ初しハぶ云心也ぶ思ハいゆ為ぐさ
ひぐ事あり

ぶい本ゆ異ある辞ある事しうの条ハ云ふ
ぶ引合を見ぐ居し叔雅言ふていをぶも又ハぶも云ふ心を
俗語ハいぐぶ云事多し見しを見しハ聞しを聞しハぶ云類
を俗ハい見しぐ聞しぐぶの云ゆ猶賤しきの詞ハい見
ぐ聞ぐ云心也こう

やうのことば雅言ふい曽て無事ありゆゑ〳〵誤る法こつらこと
扨是を心得分るふい俗語ふのを加てのごふ小ふふ一種有
見ふが聞ふごゆ云る心ゆ見ふのごふ異也雅言のごい此のごの心
ありゆふふ心得べしふ事あし

ごね ごねいごあふ同じごあの事ハもごねい所ふ云ゆ ねいかの通る也
日本紀ふうあをうねゆ云ふても知法しさもごあいも
又しのカをうゆて用を成をこん然らこと上らゆの受ぶるも
異あゆ又心も願ふ心うをくして未來を兼るやう大うふ
ぶくゆふふ詞ふ似ふゆさもごねい兼の心あゆゆふふ說
ゆもふも叶ひごくし委い次のごふの所ふゆをむを見る萬

葉三まちをの弓末ありおくしいつる矢を後見む人い語
アをぶごね同十梅の花我ハちらさじ青ふくし奈良ある人
の來て見るごね同橘の林をうゆむ郭公常ふ冬までをみ
渡るごね同ゆし引の山田作る児ひでこゆもをゆぶふゆ
ふもるゆ知るごね同十一里人も語てつごねをしをやし恋
ても死ぬん誰ご名ある人や

あね こうふいごねふゆいふ事あるを其ねを略ゆてごふゆ云
る也又思ふふいねの通てもあ法し何ふまれごね
ねゆ專同じ萬葉四我宿のタつぎ草の白露のまぬごふもゆ
おおもほゆるこうも同十うをしきやをこ郭公鳥今こそい聲

のこゝろなるに来鳴なくらまん扨此なるなるの二ツに付て論ふは
其事あり宣長の説になるは中昔の言に右なる坊なるなど
なる博士なるなどいへるなるも同じくて兼て其料にまうけ
て待心なりなるいなるみの約まるなりけり有て大方誰もく
まも然思ひけれどつらく思ふにもし兼る心なるばや。
文字は必清濁理あるに萬葉集中盈濁音の字を書られば
濁る辞なるを知べし扨は右なる坊なるなどの類に詞の躰
とり告なる渡りなる知なるなどのなどは叶はざるをや然
るをつぐなるわけるなるあるなるけれどやうに盈詞の用とな
受らるにて兼の心にはあらざる事明らけりなりけれどなるは

もの辞志の辞とりのみ受る格なるに是は然らねばゆらぐ
に思ふ人もあるべきれどそは本より用ゐざまもこそあれ心
もちそれる物にて見てあらむにさるをばあらじにてあん
日本紀の訓を據にして爰には出しつるなり

○やの部

やは歎の心をおび又疑の心を持る辞なり其歎の心なる
はや。にも相並び疑の心なるはか。にも相並ぶなればか。にし
て軽くや。はあぶらこのにして重しか。にや。にもの差なくば上
に既にいへるが如しさなれど其置所をもて續く詞より受る
もあり譬ば古今九名にしおはゞいざこととはむ都鳥わが

思ふ人いかゞや。あしや。やゝ。あるい常の格成を源氏夕霧ふ
あるれをもいろふ知てこのなぐさ先んあるや恋しきあきや。
悲しきゝ云る類ふて詞のゝぐさ先ふ有ぢきやを詞の半へ先
ぐらしる類を云也今の俗言ふていかぢあるこゞ恋しきこゝ。
あきゝゞ悲しきゝゝ云心也扨又用ゐぐるふらゆて歎の方の
みふて凝ふ心い無も多し次ふ引る歌ゞもふて其大方を辯
ゐぢし古今十あし鴨のさゝぐ入江の白波の知ぢや人をゝ
く恋むゝい後拾遺二十いろふきんいろふあやふくの春の日や。
夜半のきし家のゝらゝきしらば詞花十いろゝれゝ康のし
ぐゝむ萩ゞえの末葉の露のありぐゝの世やあゞい歎のみ

ふて凝ふ心いおびゞ其外浪速津ふ咲や此花　時鳥鳴や五
月の　夕月夜さゝや。園辺のあゞのや又菅原やふし多　葛
城やゝつま　さゝ嶋や大和　神風や伊勢あゞのや又あき
や。鶯　やゝやまて　花や。蝶や　いそぎや早あく　いゞや。
いさや。ゝし。こゝまゝや　相坂や　あふて江やあゞ
の類もいさゝゝぐの軽き重きいいゞも皆同じ事あり
又古今一谷風ふゝくゝる氷のゝゞごゝふ去出る波や春の初
花後拾遺叫いつゝあく心空ある我恋や不二の高根ふゝ
る白雲同六ちぢきあく思ひこそやさつゞくゝや獨や井手
の山吹の花後撰五是や此行も帰るも別ゞて　知も知ゝも

相坂のせき同言の葉に絶せぬ露はおくらむや昔たがゆる
まかはしせば拾遺八露の命ともなにはかなき君をまさ
見でや思ふぞ悲しかりける古今三夜や。くらき道やまよはで
するる郭公我宿をしも過がてにあくかる同五うゑし時花待かは
に有し菊うつろふ秋にあはんかや。見し同四十妻こふる鹿ぞ
鳴なる娘郎花おのが住野の花かしらずや。同五十夢にぶに逢
は夢かぞ思ふ思ひきや。雪ふみ分て君を見むかは是等は
皆疑の心也其用みざる見渡して考ふべしやはの心なるも
あるはこれはの所に云るが如し

やは

やはは これらに大方同じ古今一春の夜のやみはあやな
し梅の花色こそ見えね香やはかくるる同二吹風を鳴て恨
みよ鶯は我やは花に手だにふれたる同散花のなくにし留
る物ならば我うぐひすにおとらましやは同八限なき雲井
のよそにわかるとも人を心におくらさむやは同一桜花春
くははれる年だにも人の心にあかれやはせぬ大和物語は
さくはなに吹風にやはなびくべき野分過し君がやはあら
ぬ又古今八十世の中は昔よりやはうかりけん我身ひとつの
為になれるか後拾遺三十なみだやは又もあふべきつまなら
んなくより外のなぐさまざれきなかは唯のやの心のやは

ある事ぞの心のこゝろいふ同じ

やぞいやのあぐらこのあるふぞのをまつらる心添ふ
ぐ物を問つもるやうの心ふあふをゆ後撰九をこのあくて同じ
心ふありふしを思ふぐこぐふ思ふらむやぞ好忠集世の中
とうしゆらんそぐ片時も有経あんやぞ忍ぶをばらそ

やらんいやゆらんゆらんゆ上下ふ有ぐ辞あるを一所へ
合をゝる物ふて古くい無事也今俗言ふ何やらゝ彼やらゝあぐ
らんのをこあまりあり千五百番哥合谷ぐくを木の葉ぐ下のうもれ水
氷をべやらむ音づをもきゆ丈木春の野ふあぐ手ふうきて
行賤のたぐあぐやらむ物あををある

やもいやふ歎のものの添ふるふて唯やゆ云ふ異ある事
無もゆり又やをの心ふ云ふもあゆ萬葉三爰ふして家やも
いづくく白雲のふふ引山をこをえて来ふきゆ同こもゆくのん
ゆををゆゝ先ぐ手ふまきをる玉ハをぶれて有ゆゝをぐやも同
四空をみのゆやもふゝゆゝ云云同六をのこやもむあしつ
ゝぐをゆ云云

やふいやゆゝ歎まゝる上ふ又歎のあを添ふるふて丈木
集ふ嬉しやふゝふゝふ事見えるゆ好しつらゆ辞ゆゝ云ぐし今
の俗言ふい恋しやふ悲しやふ乳ぐ常ふゆふをゆ歎のあふ
又歎のあをそをてよふあふ云ふ理ハ同じやゝあをゆゝも心

ハ同じからざるものゝ所以引合を見るべし

○はの部

はハ切る詞の間にさしはさみて用をなす辞也されば其上下の詞にかゝりて心異なるが如聞ゆるあり次の歌どもにて其大方を辨ふべし古今三足引の山時鳥をりはへて誰にまさるはの音をのみぞ鳴同廿五忘草何をか種と思ひしハつれなき人の心也けり同三暮るとはみし明ぬる夏の夜をあかずとや鳴山郭公後撰十こゑかしはれはそこゝそ嬉しきをおもてのあらざりは見えらは思ひ貫之集来じは思ふ心もあきをさくら花ちるはまづふにさかれる世きり古今三夏は。

秋は行ふ空の通ひ路ハかたへ涼しき風や吹らむ同五我来ぬる方もきらざらぬ山木ゝの木の葉の散はまづふに新古今八廿流れ木は立白波はやく塩はいづれからまさるつみの底古今五わも出ぬ山田をもるは藤衣稲葉の露にぬれぬ日ぞなき同八物思ふは過る月日も知らぬまに今年も今日にまたなりにけり同七老ぬはて何かこの我身をせめきけむ老たば今日にはそまし物を新後撰二何はあくがれる花の色をしも心に深く思ひ初けむ後拾遺十あはてこのく雲がくるらむうくぞうりひ花はのふるなる月もはる世に此うちほにも出ぬ山田を守はくはふよりの下なるい今の

人の耳ふれて文字を加へてもるゝ云云思ふゝ云云
ゝやうに見るべ聞云安し則何ゝこゝく云云
こゝく云云云ふも唯同じ事あると思へ又こゝの如く何ゝ
あゝて一物ある理ふゝ今の世ゝ生もゝくあゝこゝふゝての
ゝを濁るいひゞ事あるこゝをも是ふてさゝるぼし叔又堀
川百首に吾妹子ふゝふゝあゝをべさゝゝ我書も見てまし
ゝゝゞゝの如し同繪ふこゝくゝ筆も及ばじ未通女子ゞ花の
をゞゝと誰ふ見せまし あゝいゝゝの心あるを略きて然聞
ゝゝる物也本ゝゝふゝゝの心有ふいゝゝゝゞ此辞古ゝの謂
ふいあしゝゝゝのゝゝ云ゝる本ゝゝゝゝの心
ある故あり是い然らねばいゝゞふ聞ゆ

ゝゝゝいゝゝふもの歎く心の添ゝふて未來の事といふい
て引戻をやうの心持る辞也ゆくゝも帰るゝゝもあゝゞの如し
又ゝゝもゝゝ相並びてゝゝもいゝ既ふ然る上ふて行ゝゝも帰ふゞも
ゝゝやうふ云ゝを是い未來の事ふ用ゐて清濁もて分てゝ叔
又ゞふ相對ひてゆうゞゆくゝゝも帰らゞ帰るゝゝゝゝやうふ
云ゝる事い上ふも云ゆ日本紀うづまさい神ゝゝも神ゝ聞えく
るゝゝこゝの神をうもきゝまさも後撰十四我為ふこゝいつら
しゝ深山木のこゝゝゝもこゝゝゝゝゝゝ恋をじ同五足びきの
山ふ生ゝゝをゝゝうしの知じふ人をゝゝゝ木あゝゝゝも後拾遺
十ゝゝをゝまいまゝ知じこゝし限あく我思ふゞゝ人い我ゝゝも

あがの類い嘸やふもを添らるふて常のやもふ異也やもい
上ふも云る如く行やも帰るもふもふ用言らす受る格
あるを是等い体言らゆ受るふても異あると知ら古今十一
思ふもこふも逢む物あるやゆふ手もらゆやる下
紐同四夏引の手引の糸とるす返しこふをぎくふも絶んや
おもふふ

やるいやふ歎のらの添らるふて今俗言ふやふ思ふ事ら
やる心也中昔の書ふい有ぞやふ無ぞやふの類俗ふある
やさあいやさふ云る心ふふい残しらるも多し
萬葉十我妹子ご忍びふをるもし紐糸ふあるふもわい
やるじやふら古今三やるやまて山郭公鳥こふつてん我世の

中ふ住るびやふら狭衣夢こふを見しふもあらぬつるさ哉
うをのいるしもいらじやふ思ふふ

やるい既ふ然る上を云て引もふをやるの心持る辞也是又
いふ相對ひてゆきびゆきふこうをびこうをびやるふ云
て古今一春立やる花も白いわ山里い物うこるる音ふうぐひを
ぞ鳴同六終ふ行道ふい兼て聞しこうふ昨日今日やるい思いざ
てしを

やるもいやふもの添らるふてやるふ異ある事あし古今二
惜先やるもやるまらあくふ春霞こうる道ふし立わふ思ふば
同八人ふるを里をんふひて來しこうやるも奈良の都もうをる名

あり きり

○ふの部

ふ ふハ總て其物其事ふくらみ透ふゞ如き心をおびて慥あらしむる辞あり。ゆゑ相並びて ふき ふし ふきり てきて し てき刂 あゞ同じ心ふ用ゐる猶此事いなの部ふ委しく云るを考ヘ合て活し又ゆゑ相對する事ハ既ふとの所ふ云てさて其ゆゑ其ゆゑるゞふらめて種くふ聞ゆるもゆるハ上ふも次次云るふ同じ古今ニ花の色ハ移ゆふきれハづらふ我身世ふ。ふるあゞ嬉きしまふ同五丈をゞふ思ふ事ふてまゞやゆゑを見きゆふハひそ人のきゝくふ同誰をゝも知人ふを

む高砂の松もむかしの友ふあらふ。同十淺ぢふのをのく篠原志のぶゆゑも人知らぬやハふ人ふし。同ニゆゑむ信濃物ゆハハあしふ。たゝふふくも散花ゞふ。ゞふ心ゝ新古今ニ春雨ハハくふあゆそゆゝ花まゞ見ぬ人ふちらまくもをし古今四逢まゞのこゝゝみも今ハ何きん。見ても心ゆふぐさゝふあくふ。後撰五何をむふ。ゆゝの見る月を思ひきんおきゆる玉もをつゞく身ふ。して扱又風雅一櫻花ハゞ毛手毎ふ。手折もて伴ふ千年の春ふ。挿む玉葉四又秋の愁の色ふ。向ふあゆ尾花ゞ風ふ。庭の月影此ニ着の春ふ。云云風ふ。云の如きふハ古くハ聞ゆる更又一種萬葉七見ぬゞゆゝふ。きん同を

こもりをるものあるべき類いあるべき云事をあらをるべき云
あり其外知るべきいふばかりを知るべきいふべる多し是いあるべ
きなるべきあるべきもらるべきもらるべきもらぬもやはり常に活こうし云
るを其ぬをりに移さるる物あるばし扱いあるべきんあるべ
いいふばかりもなるべきなるべてをそのそばるに似るべ
本をものぬをいあるべるべ。
べの心をもちるしをもやはらむ

○ての部

てい物の行をつる心をおびるめるを同じ心ばの辞を
て見をつ。聞をつ。あるべ云るを見をて。聞をて。ばいるべ見をて

聞をてをる心をあるをりて又をる相並ばるるしい上を云るべ
如し後撰叫思ひをる経をきる年ををるばをてあるをめる物
い心あるきり同三君来べて。年いくれをる立このるり春さ今
今日を成をきるこうを古今一見ての人をうらん桜花
手ごをを折て家づるををむ

てぬいてよりて不の字の心のぬを受るをてあるぬる相
並ばるしてるしあるるあるの如し後撰三こうくあるべら散て世
をやいをるしてるる花のるるいも有るるみるばるるる云る類也
唯をつくるるる云るを大方異ある事あきれるべての行果る
心加をるて心強しそい是のるみあるべてきるるるあるべ總て

て。文字加へたまるい心強くかまるぞこのし

てだい

てだいて。ちゆぞゆ受くるふてゑゆ京ば見てば聞てば
ゆゝゆ京ば見ば聞ば。ゆゝゆそひちゆい強くして今俗言ホ見と
くはゆ聞くゝば。ゆゝゆふ心あゆ扨あゆゆ相並ぶるゝしい見ゆ
ば聞あば見てば聞てばあゆゆの如し古今一梅ご香を袖ホ移
して。ゆゝゆ来てば春い過ゆゝもこゝゝみゆゝまし

てゝい

てゝいて。ホ歎のゝのゝひくるふて願ふ心ホ用る事古
て。も今もこゝゝる事あし願ふ心の辞ホ常ホあん又ね。を用る
ホ相並ぶり見あん聞あん見ね聞ね。見てゝら聞てゝらあゆゆの如
し古今四久こゝゝの天の河原の渡し守君まゝゆあばゝゝぶゝら

くしてゝら

てゝむ

てゝんいて。ゝらゆん。ゆゝ受くるふてゝあん。ゆゝ相並ぶり見あん
聞あん見てゝん聞てゝんあゆゆの如し古今五秋の菊白ふこゝぎゆ
いこゝぎしてゝむ花ゝらゆさゝゆ知らぬ我身を同七鶴亀も千年
の後い知らあくふゆこゝぬ心ふまゝを果てゝん

てゝん

てゝゆいてゝむの活ゆゝくるふて異ある事あし古今一ちゆ
ゆゝゆ恋れゆゆゝゝるしあき物を今日こそ桜をゝゝば折てゝゆん

てゝふ

てゝふいゆゝ云と略き通ゝしくるふて古くいゆゝふゆゝ云ゆ
しをゝゝふゆゝ移ゝ又てゝふゆゝ移ゝる也さゝゆば萬葉の中ホも古
きいゆゝふ後あゝい ゝゝゆゝふあゆてゝふい今の京ゝあくゝの事也

是い誰もよく知る事おごら總ての詞ふいふいふ事を
添て云る事多しゆをゆもいふらゆをゆいふいもゆ
くゆもゆいふ事をゆくゆいふゆもあゆの類古ふも今も常
ふ多し雖の字ふいふふもの訓あるもおのゆどつら添て云習
ふる故あゆ雖いゆもふて雖言の二字をこそいふゆもゆい
訓法理あるをいるゆいふふもゆさふ訓來るもて總て
いふゆいふふい軽く添てもちる則しるを知ばしされば
辞ふいろらゆるもおのづつら辞の如しらて思ふふ萬葉
一春過て夏來るらし白妙の衣ほしたり天の香久山ゆある
持統天皇の御製歌を小倉百首ふ衣ほをてふこふて入ら

きるい唯衣ほを天のこゆぐ山ゆいふ心ふてふい軽く添
いる物あゆさるを此御製歌の心違ふゆて誰もくいふ
くゆゆゆ来いふい中くふふいふふ也ゆいふほし次ふ引る證
詩ゆもを見てさふるゆし古今八散ゆるゆ後いあくふふふ
る花を思い知らゆもまゆゆふてふこふふ六帖一梅の花散てふ
あゆふ春雨のあり出て鳴鶯の聲同五道ふあひてをゆを
しこふふ降雪の消べきゆこゆふらふてふゆるぎも千載集五いる
こふして過ふし方を過しきん暮しわゆふてふきのふきふ哉
續後撰一冬きていい衣かをてふひまもあくをゆるて空の天
のこゆぐ山新撰朗詠蛍いさわ火のまゆゆふるこゆをふ見えて

いなみのなる てふ螢なりけり

てへ てへハてふに同じくいへれバいへの略り轉りたるにていへれバをてへれバとてへれバなれバ云るいとく多し古今廿今さらにとふべき人もおもほえず八重むぐらして門させりてへ 拾遺八我のみやこもたるてへバ高砂の尾上に立る松もこもたり

で でハぞぞぬねの活きたる辭なり見じ見ぞ見ぬ見ね見で聞じ聞ぞ聞ぬ聞ね聞でなどの如し扨其心ハずしてと云に似たりされバ宣長の説に則でハずしての約りたる辭なりと云ともず為てハ為てふ詞の加はりたるなれバさハ有べくもあらずざぞぬねの活きが定も無しされバ猶又思ふに萬葉にハずてのみ有てでてふ云る事見えざれバでハ本へずてけ受たるにて夫を略くに附てずの濁をでに持たる物にもやあらむさる例いと多し古今廿手もふれで月日経にけり白まゆみおきふし夜ハいこそねられね同廿一かれはてん後をバ知らで夏草の深くも人のおもほゆるかな

○つの部

つ つハまのあたりさしあたりたるやうの心を持る辭なり扨宣長の説につハぬなど相並びて同じ心にてこれハなにぬねなど活き是ハつてなど活きかはる故にこのなにぬねなど此つ。

ぞふ常ふ相並ぶありそいぬつ。ゆ並び赤ふねゆて。ゆ並居
て先ゆるつるゆきつきゆふかつあかゆ居しつ居しゆらむ
つらむゆらしつらしゆ並び又ふだてそあんてんあまして
ましゆ並び又ふきてきふしてしふきかてきかゆ並び又ね
ゆてらゆ並びあぬゆてゆ並居かゆ云るい誠ふさる事也
猶てらいあむゆも並居る事考ゆもらしつる物ぞ此事委し
くいあんの耳ふいふぐし古今我心あぐさえうねつさら
しあや焼捨山ふ照月を見て同身い捨つ心とぐゆもきふ
らさじ終ふへいうゆ成ゆ知るぐく後拾遺今ちかいあら
ぶる心まして花の都ふやしろさぶえつ。

つるいつ。ふるの添るふてつの心を強こうし先且言
と續る用となをゆ古今にゆきつ。ぞきひて折つる年の内
ふ春いいくこうもゆらじゆ思ゆば同にてっあくて夢ふも人
を見つる夜いゆしふの床ぞ起こうかきる

つきいつるの活さるふて心異ある事あし但言と續
る用にあさえ古今にてるぐふ身をこそ遠く隔てつき心
い君ご影ゆあめふき同一折つき袖こそふ冥梅のきる
ゆふゆや爰ふうぐひすの鳴

つゝいつ。を二重ねるふて彼まのゆるめさしゆるめ
るやうの心いらく強し宣長の説ふついて。ゆ通ゆめ

されぬべい廣くて‖い狭し故ふて‖ゆくゆくあぢき所をてゆく
いくそうれぬもてゆくふぢをて‖ゆくいてい叶ひぬ事
多し譬ば音ふ聞て恋るゆくふい然音ふ聞て後ふ恋
渡るふもいい又音ふ聞ふ恋渡るゆく同時ふ相交るふも云
あり然るを音ふ聞て‖恋ばるゆくい音ふきくゆく同時ふ相
交ふのみいふ辞ふて先音ふ聞て後ふ恋渡るふい云こゞし
總て‖ついい此心あゆゆくいるいさる事あれぬも且くのこと
と略ふるる詞あゆゆくいるいいるじきひこゞふ也つの辞を
重ねる物ふらそいれ又あゞらの心の‖てその心の‖て
あゆゆくふ分て云人もいるもふも本ふ種くの心いるふへ

いるふ其用あぶ方ふていくこゞ心異ふ聞ゆるのみ也
古今四物こゞふ秋ぞこれしきもみぢて‖うつろひゆくを
限ゆゆく思ふべ同山里い秋こそ殊ふうびしきを鹿の鳴音ふ
目をさ方しつ‖同二ふの免て‖いるで年ふる偽ふこゆぬ
心を人い知らあむ同廿月夜ふい来ぬ人まくるこゞらし
雨もふらあんうびつ‖もわむ同一君こゞふ免春の野ふ出て
若菜摘うゞ衣手ふ雪い降て‖同山ざくら我見ふうを春
こゞ生み峰ふも尾ふも立つし‖大方是等ふて辨ふ居し
猶いうゞ佗て‖いうびつくて降て‖いゆつくふの免
て‖いふの免つくゆくいるふ心ふ見を春いるくゆく聞ん安し

づゝい物をそろる詞の間ふそろまりて用をあるを事辞
あらざるもの辞ふ近し伊勢物語鳥の子を十づゝ十い重ぬ
かゝもおもそぬ人を思ふものういあるの類一人づゝふゝ
づゝ常ふも云ふ異ある事あし古絵巻の詞書ふ錦づゝ
見そろるも此づゝ おらん
う猶ふゝうむゝふ綾づゝ かゝふらゝの

言霊のそろべ中篇上終

づゝい物をそうる詞の間ハそさまゝて用をあるを事辞
あらぬ事も辞ハ近し伊勢物語鳥の子を十づゝ十ハ重ぬ
かゝもおもそぬ人を思ふものゝいあふゝの類一人づゝ
づゝおゝ常ハも云ハ異ある事あしら綾づゝ古時繪巻の詞書ハ錦づゝ
見そうるも此づゝおらん
う猶ようゝうむゝふ

言靈のそうべ中篇上終